



いずみ

No.93

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 63



《優しい歌 The Singing Goat》

河崎 ゆかり

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 63

作者の言葉

ダムからすくい上げられ、積み上げられた流木達。自然の力で作り上げられた不思議な形を持つ流木達の中から、引きつけられるように見つけたこの木。魅力を生かすには？どのような形が潜んでいる？

唯一無二の形と向き合い、その木肌・年輪にある記録から思いを巡らせる日々は長く苦しく、そして楽しく。見えてきた生き物、意を決して刃を入れると、微笑みを感じ、歌が聞こえてきた。

素材と対話が出来たような、そんな喜びを強く感じた作品です。
(札幌市在住)

タイトル : 優しい歌 The
Singing Goat
制作年 : 2024 年
素 材 : ダム流木、タコ糸、
石粉粘土、竹ひご
サ イ ズ : H 45×W 35×D 30cm
作者蔵

連載

宮の森の四季 63

本郷新記念札幌彫刻美術館

「記号設地問題」

課長 嶋田 雅人

宮の森に秋の虫の音が響く季節となりました。この音色を「リーン、リーン」という言葉で捉えるとき、私たちの内では音の記憶と秋の気配が分かちがたく結びつきます。これは、前回の寄稿「感覚と言葉」で触れた、言葉が実感とつながった状態と言えるでしょう。近年話題の AI は、この音をデータとして知ることはできますが、身体を持たないため、その響きがもたらす情感を実感できません。言葉（記号）が実体験と結びつかない「記号接地問題」です。AI の言葉は、膨大な情報からもっともらしい記号を組み合わせた、辞書の中を巡るようなものかもしれません。

この問題を考えるとき、彫刻という芸術の持つ力に改めて気づかされます。彫刻は、作家の思想や感情といった観念を、ブロンズや石という確かな物質へと「接地」させる営みです。作品の前に立ち、その量感や質感に触れるとき、私たちの感覚は揺り動かされ、言葉だけでは得られない深い理解が生まれます。それは身体を通した、まさしく「接地された」鑑賞体験なのです。

AI の進化が著しい今だからこそ、この身体的な感覚を大切にしたいものです。美術館で、皆様自身の「接地された」体験を見つけていただければ幸いです。

上記エッセイは、テーマを与えて AI が書いたものです。ここまで書けるのかと驚きつつ、まだ接地していない感じもします。人間としての感覚や知力を総動員して「接地」しようと思うこの頃です。



バ ト ン

渡辺 貞之

「ボク、よく見てごらん。この樹は生きてるんだよ。ほら、葉っぱだって青々しているだろ。だからさ、ボクはこの樹は生きているんだって思いながら描くんだよ」

私がまだ小学3年生位の頃、夏休みの宿題で駅前の公園にある大きな柳の樹を描いていた時、突然後ろから声をかけてきた老人がいました。どんな人だったか、もうすっかり忘れましたが、あの時かけられた言葉がまだ10歳足らずの私に忘れ得ない言葉として残りました。あの老人は一体何者だったのでしょうか。ひょっとして著名な画家だったのかもしれません。その後、旭川のエドワード・テイト教育大学に入学した私。あの頃「熱い抽象？」というのが大流行でした。しかし私にはどうしてもその抽象画の意味が理解できなくて、思い切ってA教授に相談しました。すると「じゃ、これからはとにかくデッサンしろ」そう言って教授の部屋でいつでもデッサンできるようにしてくれました。私は毎日のようにデッサンをしました。ところが、朝行ってみると私の描いたデッサンに、黒々と×がついているのです。次の日も又、×でした。そんなことが毎日のように続き、どうして×なのか私は分からなくなり、教授に訊きました。

「俺の目でどこが悪いかはすぐでも言える。でもそれは俺の目だ。それより今、お前は どうして×がつくか考え悩んでいるだろ。それ！それがデッサンする一番大切な目的

なんだ。絵というのは所詮、自分で考え、悩み自分で解決するもんだ。まあ、できなきゃそれまでだな」

そう言われたのです。

30歳になった頃、ある公募展に出品しました。題名は「旅人」でした。そして主催者のY先生に批評をお願いしました。「ここに描かれている人物は君自身なのかい？」

「はい、そのつもりです」

と答えると

「そうか。そりゃ駄目だね。絵描きが誰かが踏み固めた道を歩いているなんてのは…。絵描きはいつも荒野を歩かなくちゃな」と言われました。

思い起こしてみると、これまでこうした沢山のエピソードと色んな人に支えられ、今日の私があるのだということがわかりました。それぞれのエピソードや人に一つでも出会わなかったら今日の私はなかったでしょう。いつの間にか気がついてみると、私はもう80歳を越えた長老？の域に達しています。現代の私は思うほど立派な絵描きにはなっていませんが、長老とささやかれる今でも、まだ絵を描き続けていれるということは本当に幸せなことです。これからは様々な人たちから渡された大切な「バトン」を、今度は私が誰かに渡すことになるのでしょうか…。(深川市アートホール東洲館館長、独立展・全道展会員)

「没後 50 年 山内壮夫展」報告

本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員 梅村尚幸

2025 年 6 月 14 日～9 月 28 日にかけて、本郷新記念札幌彫刻美術館で山内壮夫展が札幌で初めて開催されました。「1950 年以前の制作」「1950 年以降の制作」「モニュメント」「建築彫刻」の 4 章立てで計 63 点（本郷新作品 2 点含む）の展示です。そのうち、モニュメントや建築彫刻の習作を含む石膏作品が 19 点あり、これらの多くはほぼ初公開です。また、現存しないと研究者に思われていた《七生》などを個人宅から見つけ出し、展示したのも特徴です。



今回の展覧会のために 1 年かけて調査をしました。特に時間をかけたのは山内壮夫の日記調査です。中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館に 37 冊保管されており、かなりビッシリと文章が綴られているのです。そのなかから制作に関係する部分を Word に打ち込む作業を半年かけて行い、合計で 20 万字以上のデータを作成しました。データ化のおかげで日記の情報を俯瞰して見やすくなり、引用も楽になり、キーワード検索をかけられるようにも

なりました。このデータを他の研究者にも共有して、それぞれの観点から考察してもらった結果、本展開連書籍『山内壮夫 共鳴する彫刻』（中西出版）が完成しました。

展示も日記の情報をふまえた上でまとめてあります。特に建築彫刻についてはこれまであまり紹介されていませんでしたが、山内本人はかなり力を入れて取り組んでいたことが日記から明らかであり、本展では 1 章設けて大きく取り上げました。北海道開拓記念館や新潟市庁舎など、建築家・佐藤武夫とのコラボレーションは計 10 回にも及び、この二人の阿吽の呼吸は小気味よいものです。

それにしても、全道展創立会員であり、札幌市内に設置したモニュメントが 23 点も残っている功績ある彫刻家にも関わらず、最もゆかりある札幌でこれまで一度も回顧展が開かれていなかったのは驚きです。要因は色々考えられます。例えば、遺作のほとんどが旭川市に寄贈されたため、作品輸送に費用がかかる。新制作協会で本郷新の右腕的な立ち位置だったこともあり、人物像のインパクトが薄い。建築彫刻やモニュメントの制作に力点を置いたため、重要な作品を美術館内で展覧しにくい。・・・などなど。

山内壮夫を美術史の中で評価していくにはまだ多くの課題が残っています。しかし今回の展示では、「山内壮夫を札幌で紹介する」ということ自体がまず重要であり、大きな一歩を踏み出せたと自負しています。これを機に山内ファンが増えることを期待しております。

最後になりましたが、本展開催にあたり、調査や作品借用にご対応いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。※写真は《弟橘媛像＝制路献身》1943 年、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館蔵

北海道デジタル彫刻地図（チョウマ）の公開に寄せて

札幌彫刻美術館友の会 橋本信夫



このたび、「北海道デジタル彫刻地図（チョウマ）」が完成し、「北海道デジタル彫刻美術館」と並ぶもう一つの柱として、皆さまにお披露目できる運びとなりました。長年の夢がこうして実現したことを、心から嬉しく思っております。

この構想が生まれたのは今から 30 年前。北海道全域に点在する野外彫刻を記録し、地図として可視化するという、素人にはあまりに高いハードルでした。技術も予算も乏しいなか、会員や道民の皆さまの協力を得て、一基一基現地足を運び、写真を撮り、文献をあたりながら、4,200 点を超える彫刻を記録してきました。

特に大切にしてきたのは、「記録すること」「残すこと」。誰のためか分からない未来の利用者のために、地道にデータベースを築いてきました。今回の地図公開は、その一つの到達点です。しかし、まだ道半ばであり、情報の不備や漏れも少なくありません。これからも皆さまのお力を借りながら、さらに充実した「北海道彫刻アーカイブ」へと育てていければと願っております。

地図をご覧くださいながら、これまでの歩みを振り返り、ご自身の関わりに少しでも誇りを感じていただければ、これに勝る喜びはありません。ご協力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

※北海道デジタル彫刻地図（チョウマ）への接続方法などについては「いずみ」の次号以降で公開する予定です（編集部）



2025 年度友の会バスツアー

7月21日 岩見沢、美唄

札幌彫刻美術館友の会の 2025 年度バスツアーが 7 月 21 日、34 人が参加し行われました。ジェイ・アール北海道バスを貸し切り、いわみざわ公園バラ園、リトルロックヒルズ、アルテピアッツァ美唄を日帰りで行りました。李曼葛さんと荒井篤子さんに感想を寄せてもらいました。

感謝ばかりです

李 曼葛

初めて多くの皆さんとお会いしたのが今回のバス旅行でした。バラ園のお花、自然と対話するお食事時間、内面と向き合う彫刻見学、内部世界にも外部世界にも新たな発見がありました。何から何まで感謝で充実した一日でした。運営の方々、本当にありがとうございます。これからの清掃活動などで少しでもお力になればと思っています。

ずっと人の出会いは不思議なものだと思ってきましたが、そのあとの週にご一緒に清掃に参加された方が「ご縁というものは元々つながっているもので、ただあるきっかけによって露わになって感じるだけだ」とのお言葉をおっしゃって、あ、なるほど、とてもスッキリした気分になっています。これからも日々のご縁を大事にして、皆さんと活動していきたいと思います。最初に出会えた細川さんに本当に感謝ばかりです。総会の前に少ししかお話しできませんでしたが、ぜひこれから少しずつやっていけたらと思います。「本当にありがとうございます」のバス旅行でした。

心躍る旅

荒井 篤子

この度は会員でもない私にお声をかけて頂き、感謝いたします。

今回のツアーで訪れた「アルテピアッツァ美唄」では、安田侃氏の作り出す世界に、強く引き込まれました。彫刻が自然の中で、生き生きと語りかけてきて、力強さやユーモアにあふれ、心が解放されていく感じがしました。又イギリスから移築再生した建物が並ぶ「リトルロックヒルズ」での昼食は格別で、しかも参加者の方が素敵な音楽演奏を聞かせて下さり、非日常の時空を味わうことができました。「心躍る旅」をありがとうございました。



山内壮夫シンポジウム 3人が魅力を語る



本郷新記念札幌彫刻美術館で回顧展が開かれた彫刻家・山内壮夫(1907～75)の魅力を語るシンポジウムが8月6日、札幌市民交流プラザのSCARTSスタジオで開かれた。同美術館の主催。講師3人が、従来あまり語られてこなかった彫刻家について探った。

登壇した3人は、展覧会の図録を兼ねて出版された『山内壮夫 共鳴する彫刻』(中西出版)の共著者。本の内容を踏まえて、回顧展を担当した同美術館の梅村尚幸学芸員が、建築家佐藤武夫との二人三脚ぶりを解説した。また、道立旭川美術館の寺地亜衣学芸課長は、3点が現存する「浮游(ふゆう)」のフォルムが完成するまでの過程を詳しく分析し、「抽象へのターニングポイント的作品になった」と位置づけた。

一方、藤井匡東京造形大教授は「山内壮夫について語り残したこと」と題し、書籍では触れなかったテーマについて紹介。大きな影響を受けたブルデルについて、清水多嘉示経由だったのではないかと、また「セメント彫刻展」に出品した8点のうち6点が現存することなど5項目のテーマを示した。

後半は山内壮夫作品の特色について討論を行った。梅村学芸員が「未知の素材に挑むチャレンジ精神がある」と話すと、藤井教授が「でも、だからこそある種の弱さがあるのでは」と指摘し、器用な作家に見えてしまい、評価につながらなかった可能性に言及した。

また、没後の作品名の変遷も話題に上った。札幌・中島公園の「小さな牧神」がいつごろ、なぜ「猫とハーモニカ」と呼ばれるようになったかは謎といい、梅村学芸員によると、美術評論家匠秀夫が1983年に書いた文章に、すでに「猫とハーモニカ」とあるという。梅村学芸員は「掘り下げがいのある作家」と述べ、研究の今後の進展に期待していた。

山内壮夫の彫刻作品名に新資料

中島公園の4点



シンポジウムでも話題になっていた山内壮夫の野外彫刻の作品名だが、藤倉会員が過去

の北海道新聞記事を調べていくうち、中島公園に置かれている4点の作品タイトルすべてが現在と異なっていることが判明した。

見つけたのは1965年11月21日の記事。それによると「猫とハーモニカ」=写真=が「小さな牧神」となっていたほか、現在「笛を吹く少女」は「笛」、「母と子の像」は「果」、「鶴の舞」は「鶴の舞い」と、全点のタイトルが現在とは違うものになっていた。

友の会は、札幌市に改名を要請している。

近美の本郷新「嵐の中の母子像」が「この1点を見てほしい」に



道立近代美術館の前庭に常設展示されている本郷新の彫刻「嵐の中の母子像」が、同館の所蔵品展内のコーナー「この1点を見てほしい」に選ばれている。

学芸員が1点を選び、多角的な研究を通して作品の奥深い魅力を紹介するシリーズ。野外彫刻が選ばれたのも、本郷新の作品が取り上げられるのも初めて。

解説は11月24日まで掲示されている。

事務局日誌▼5月22日＝榎原さんを交えデジタル学習会(エルプラザ)▼23日＝山内壮夫「猫とハーモニカ」の名称変更で高橋会長が市文化振興課に陳情▼31日＝中島公園・木下成太郎像の清掃▼6月8日＝山鼻屯田兵像の清掃▼12日＝定例役員会(エルプラザ)▼22日＝サンクスデー▼7月13日＝大通公園の彫刻清掃▼21日＝バスツアーで岩見沢、美唄へ▼27日＝真駒内地区の彫刻清掃▼8月2日＝中島公園の彫刻清掃▼6日＝山内壮夫シンポジウム(SCARTS)▼14日＝定例役員会(エルプラザ)▼9月10日＝定例役員会、デジ彫打ち合わせ(エルプラザ)

編集後記▼札幌の真夏日日数が1世紀ぶり記録を更新するなど大変な猛暑になりました。くれぐれも体調管理にお気を付けてください▼資料整理ボランティアや彫刻清掃に長く参加した島岡孝子会員が7月30日逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。(梁井)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.92

2025年10月1日発行

発行人 高橋 大作

編集者 梁井 朗

札幌市豊平区西岡2の13の10の3

Yanaiakira7@gmail.com

090・2690・4015

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」93号 目次

自作自選63 《優しい歌》	河崎 ゆかり	表紙
宮の森の四季63「記号接地問題」	嶋田 雅人	2
風見鶏「バトン」	渡辺 貞之	3
「没後50年 山内壮夫展」報告	梅村 尚幸	4
北海道デジタル彫刻地図の公開に寄せて	橋本 信夫	5
友の会ニュース・バスツアーに参加して／山内壮夫の中島公園の彫刻名めぐり新発見／山内壮夫シンポジウム		6・7
事務局日誌／編集後記／目次／美術館行事予定		8

本郷新記念札幌彫刻美術館の行事予定

本 館

■ 札幌芸術の森開園40周年記念 彫刻三昧

札幌芸術の森美術館の名品50選

10月11日(土)～2026年1月4日(日)

■ 館長と梅村学芸員の日曜講話 彫刻編

10月5日午前10時半～正午 秋の野外美術館解説ツアー(この回は、札幌芸術の森野外美術館)

■ サンクスデー 10月19日(日)

記念館

■ コレクション展 2025—2026

～来年5月24日(日)

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目

☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>